

東ティモール 美味しいコーヒーに出会う旅

フェアトレードコーヒーツアーに参加して

有機コーヒーをフェアトレードで東ティモールから輸入販売しているNGO団体パルシック。その、コーヒー農家を訪ねるスタディーツアーに参加した時の様子をご紹介します。
*旅行は、コロナパンデミック前の2019年8月中旬から7日間で催行された。



到着とサンタクルス墓地

晴天の中、私たちツアー一行5人は首都デビリの小さな空港に降りた。入国には観光ビザが必要で、このタイミングで発行してもらうのだが、申請書類に記入するための備え付けのテーブルやペンなどは一切見あたらない。みんな「え?!ここで記入するの?」と小さな窓口の前(しかも屋外!)で並びながら、自分たちのバックからゴソゴソとペンを取り出して、壁やバッグを台にして用紙に記入したことを新鮮に覚えている。いよいよ、旅の始まりである。

まず目指すのは、サンタクルス墓地。いきなりそんなディープな場所へ連れて行かれたのには意味がある。何故ならこの国の成り立ちを学ぶためには、1991年に起きたサンタクルス虐殺事件を知っておかなければならないからだ。

東ティモールと言う国は1975年までポルトガルに支配されていた

たが、翌76年には隣国インドネシアによって合併を宣告されてしまう。

以降、市民が独立を求めの対し、インドネシア国軍による弾圧が続いた。1991年、独立派の若者がインドネシア国軍勢力に殺害されて、そのお墓がこのサンタクルスに建てられた。その殺害から2週間後の吊いの儀式に集まった人々が、独立を求めてデモ隊へと変容し、慌てたインドネシア軍が群衆に発砲。最終的に死者270人以上、負傷者は370人を超える大惨事になったという。事件を機に、この国の惨況が国際社会の知るところとなり、インドネシア政府に対しての責任追求の声が高まるようになる。ただ、その後もインドネシア国軍による破壊と暴力行為は続き、国際暫定行政機構の設置などを経て、この国民は、ようやく2002年に独立を勝ち取ったという歴史がある。つまりは「アジアで最も若い国」が東ティモールという国なのである。私たち一行も小さいキャンドルに火を灯して、犠牲者のご冥福をお祈りした。

コーヒー農家さんを訪ねて

首都デビリから車で2時間ほど離れた山間部、標高1400メートルほどのところに、コーヒー産地のマウベシ郡がある。デビリでは半袖だったのに、うっすら霞がかった冷たい空気に、ダウンジャケットを羽織った。こんなひんやりとしたところでコーヒーが収穫されるとは意外だった。

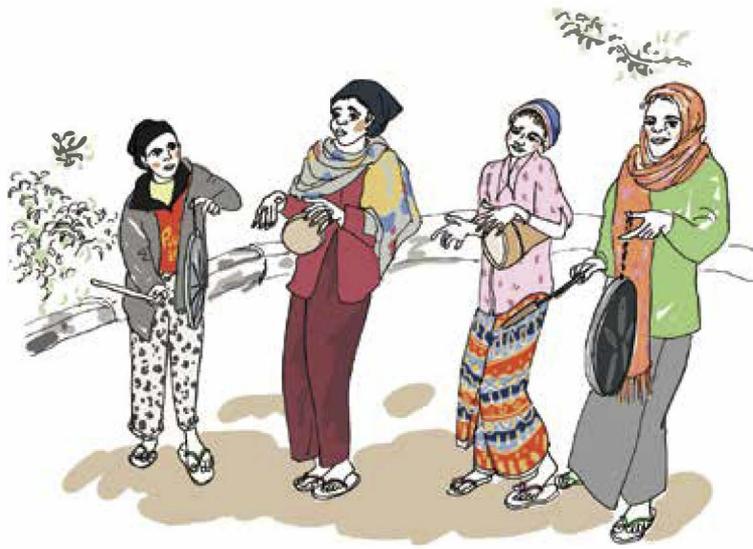
そこからさらに車で、道とは言えない道を登って行き、ハヒマウ集落へたどり着いた。待っていたのは村人約50人の総出の歓迎式である。

村長さんの挨拶から始まり、続いて葉巻と噛みタバコが出てきた。私たちは、初めての経験に戸惑いながら



吸い方を
見せてくれる
お母さん

ら、見様見真似で味わう(ふりをした。)それを見て皆の笑い声が弾ける。続いて村のお母さん達は太鼓を叩いて踊りながら、私たちに民族衣装を着付けてくれた。この温かいセレモニーのおかげで、私たちは村の方たちと一気に打ち解けることができた。



その後、小屋に招かれ、テーブルを囲みながら、マウベシコーヒー生産者協同組合(COCA MUCOCAMA)に所属する皆さんから、コーヒーや彼らの暮らしについて様々なお話を聞くことができた。

フェアトレードを開始して、パルシツクの現地スタッフによる指導の下に、コーヒーの生産方法を改善し、品質が上がってきていることや、この村からも数名の子どもを大学に送ることが出来るようになったということなどである。只、やり取りをする中で、この小さな村でも世代によって、子ども達に対する期待にギャップがあることが分かってきた。ポルトガル占領時代から生き残ったという、長老的存在のお爺さんは、子ども達は、首都ティリで勉強しても、やはり村へ戻してコーヒー農家をやらせるのがいい。何故なら一度「都会っ子」になると、農業ができる体力などが養えないので、早いうちから鍛えるべき、との意見。一方、その次世代のお父さん達は、子供が都会に残って、お金を稼いでくれるならそれでもいいと言う。そして、「日本は何でもあつて、とても豊かなんでしょう」と質問をしてきた。確かにこの村にはテレビや、いわゆる家電は一切ない。対して、私たちの暮らした物質的にはとても豊かである。でも、彼らのように家族みんなで過ごす時間を、なかなか持てない家庭があったり、子どもの孤食などの問題もある。また、村にはホームレスもない。どちらがいいのか？

そんな話をしているうちに日は傾き、暗くなってきた。村長さんが電気をパチツツつけてくれて、ぶら下がった電球に光が灯った。去年から村に太陽光パネルが1つ設置されて電気が付くようになって

たという。しかし、「さあ夕食の準備」となった頃、電気はまたパチツツと消え、「停電だ！実のところ、まだ週に数回は停電なんですよ」と村の皆は笑った。暗い中で料理、夕食となったが、遠い国の山中にあるコーヒー農家さんのお宅でテーブルを囲む楽しさに、暗さは全く気にならなかった。



好奇の目で私たちを見守る皆さん

モーニングコーヒー

翌朝、村の方達のコーヒーの飲み方を見せてもらう。

まず、深さのある白に入れた生豆を、金属の棒でついて、薄皮をとる。



次なる焙煎は、中華鍋を焚き火にかけて、かき混ぜながら行う。かなり黒くなったところで、再び白に戻して、今後は細かくなるまで砕く。粉状になったら、大きなネルに入れて、手鍋ですくったお湯をジャージャーっと大胆に注ぐ。これでコーヒーがはいった。



飲み方は、ガラスのコップに注いで、砂糖を2杯くらい入れるのが一般的だそう。かなりピターなワイルドな味で、同じ豆を日本で焙煎して飲むのとはまた違う。ひと作業を終えた後で、美味しかった。ここでは8歳の子どももコーヒーを飲むという。村人はたいいて朝食は取らず、コーヒーをボトルに入れて山に出かけ、午前中はコーヒーチエリーを積みながら5杯くらい飲んでしまいうらしい。

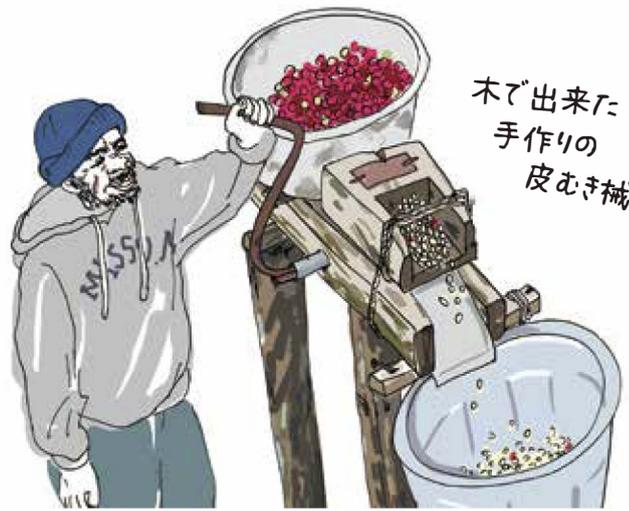
コーヒーチェリーの収穫と加工体験

早速、私たちもカゴを携え、コーヒーの木が生えている森へ。男性、女性、そして子ども達も、まるでヒクニックに出かけるように連なって歩く。途中、村人が食料としている、芋や豆を植えた畑の横を通る。食卓にはここから採ったものが並ぶらしい。お母さんは、朝とお昼はお辛しか出せなくて申し訳ない、と恥ずかしそうに言った。

コーヒーの木はモクマオウなどのシェードツリーに囲まれながら、その中に生えていて、たくさん赤い実をつけている。パルシックの現地スタッフでコーヒー事業の責任者を務める36歳の若きリーダー、ネルソンさんは、赤い実だけを採るように、と皆に見本を見せながら指導している。収穫後は、チェリーをシートの上に広げて、実を分別していくのだが、ここで、未熟な青いチェリーは無駄になってしまう。摘む段階で、選別の精度を上げることがひとつの課題であり、ここが何年経っても直らないところなのだ、と、ネルソンさんはぼやいていた。

残った実は、水で洗われ、手作りだという果肉除去の機械にかけられる。機械の上部についたブリキの桶のようなところへチェリーを入れて、横についたハンドルで歯車のようなものを回すと、チェリーが機械の中に引き込まれて、赤い皮が剥

けた状態になって種の部分だけが機械の先から出てくる仕組みだ。皮は機械の下から排出され地面にほとんど溜まっ



こうして取り出した種の中には、機械で取り切れなかった皮が一部混ざっており、これを、また手作業で取り除くのだが、お母さん達の手は早い。次の工程は、これらを一晩水につけて発酵させる。今日の作業は、一旦ここで終わるが、翌日はこの種を綺麗に洗い、天日干しにするという。こうして出来た豆には、まだ薄皮がついてはいるものの、私たちが目にするコーヒー生豆にかなり近い形になっている。ここまで、本当に全ての工程が手作業であり、手伝ってみて初めて、私たちが

いたたくコーヒーの尊さをしみじみと感じた。

この後、村々から収穫された生豆はマウベシにあるコカマウ組合の加工場に一旦集められる。今度は近代的な大型電動機械で薄皮を除去されて、更なる手選別で悪い豆は弾かれ、麻袋へと詰められる。そしてこれが船で日本まで届けられるのだ。

海への向こうの生産者ともつながる 私たちの暮らし

日本では、コーヒーはごく限られた地域を除いて、まず生産できない。生産できないものを、欲しいと言って、私たちは世界中から色々な食べ物を集めてくる。そうして自由貿易は謳歌されてきた。でも実は、このシステムが生産者の権利を奪い、生活を貶め、貧困を増長している。実際にものを生み出しているのは、彼らなのであって、生産者には生産者の権利がある。なのに、現在の貿易システムはどう見ても不健全な構図となっているのである。

そこに気が付いたのなら、何が出来るのか？ こうしたスタディツアーを利用して、自分の身体で産地の暮らしに体験し、自分自身で産地の暮らしに体験し、彼ららもう私たちの友人である。友人の暮らしを一人でも多くの別の友人に話

してみることで、新たな繋がりを生むかも知れない。またもちろん、フェアトレード商品の購入という形で支えることも出来るのだ。

(絵と文・館林愛)

有機栽培
ティモンコーヒー
(東ティモール産)



豪雨緊急支援のお願い

2021年4月4日の豪雨の影響で、首都ディリのコモロ川が氾濫し、市内の広範囲が浸水。海岸沿いの低地も冠水し、国全体では*33,000を超える世帯が被災しました。パルシックの事務所やスタッフの住居も床上浸水の被害を受け、屋内1メートルほどが泥水に浸かりました。マウベシ郡では数か所で地滑りが発生した報告があります。パルシックのサイトでは支援のための寄付金を募っておりますので、是非ご協力をお願いします。



*東ティモール国連常駐調整官事務所/UN RCO Timor-Leste調べ(5月6日現在)